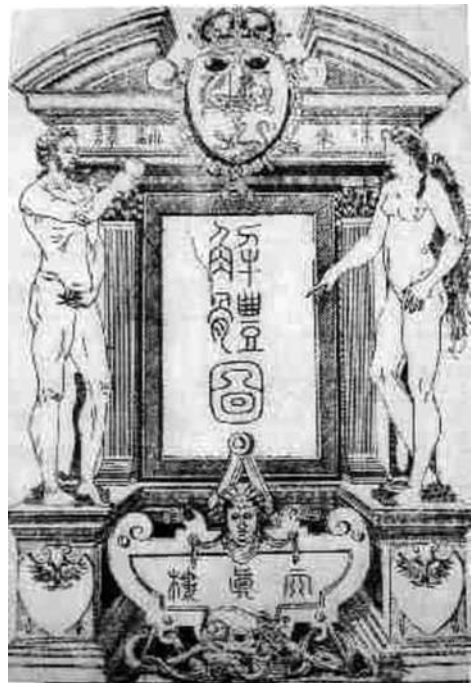


# は し が き

明和8年（西暦1771年）江戸小塚原の刑場で一人の女が処刑され、遺体は「腑分け」と呼ばれる解剖に付された。その腑分けを見学した杉田玄白、前野良沢ら当時の高名な医学者は彼等が解剖学を学ぶのに用いたオランダの医学書〔Ontleedkundige Tafelen：いわゆるターヘル・アナトミア〕の記述の正確さに感銘を受け、以来3年の歳月をかけてその翻訳を行った。時は8代將軍吉宗の治世、洋書の禁が解かれて間もない頃であり、江戸の出版業者・江戸仮須原屋市兵衛がこの翻訳を「解体新書」と題して出版した。日本における西洋医学の先駆けである。

さて、医学生が専門教育の最初に課せられる実習課題は人体解剖である。これは約半年かけて死体を解体して人体をシステムの的に理解するものであり、まずは人体機能の概略を学んだうえで死体の全体観察を行い、続いてメスを入れて筋肉、各内臓器官の構造、そして神経、血管による各器官の連携を確かめながら人体のすべてを理解する。

西洋医学には及ばないまでも電子工学の歴史も100年を越えており、殊に第二次世界大戦後の電子回路技術の急速な発達に伴って優れた教科書が多数出版されてきた。それらを俯瞰すると、大部分は真空管や半導体による能動素子の解説から始まり、続いてその応用である各種増幅回路、発振回路、パルス回路とそのバリエーションを積み上げていく筋書きになっている。この流れは電子装置の構成要素である各種電子回路の技術を漏れなく理解するという点では適しているが、我々に身近な電子装置の仕組みと、その中での各種電子回路の位置づけと連携の理解には困難が伴う恐れがある。そこで本書では「解体新書」のマインドに思いを寄せつつ解剖学書風に電子回路技術のストーリーを述べることにした。



2006年10月

著者記す